

おお だて あと  
大館跡

■指定年月日／昭和52年4月5日  
■所在／松前町字神明  
■管理／松前町



史跡大館跡

大館跡は、松前町字神明から字福山にかけての丘陵地、勝軍山の裾野が街の中に突出した舌状台地上にあり、東はバッコ沢、西は小館沢にはさまれ、前方に大松前川が流れる標高45～55mの天然の要害地である。

大館は、「道南十二館」の一つで、蝦夷管領安東氏あんどうが同族の下国定季さだすえを館主として配置し、蝦夷地で安東氏の代官を行っていた館である。

康正2年(1456)に発するコシャマインの戦いにより、十二館のうち茂別、花沢の2館が残り、この時、花沢(上ノ国)館主蠣崎季繁かきざきすえしげの客将である武田信廣たけだのぶひろ(後の松前家第1世)がコシャマイン父子を倒した。その後大館は、下国定季つねすえの子恒季が館主となったが、粗暴ぎょうじょうの行状が多く、明応5年(1496)、同族によって自害させられ、代って相原季胤あいはらすえたねが充てられ大館を守らせた。永正10年(1513)にアイヌとの戦い(大館合戦)が起り、相原氏は滅んだ。

翌11年(1514)、花沢(上ノ国)館主2世光廣みつひろは、上ノ国から小舟180余隻で松前大館に移り、館名を徳山館と改め、後に安東氏の代官となった。

蠣崎氏(後の松前氏)は、2世光廣みつひろ、3世義廣よしひろ、4世季廣すえひろ、5世慶廣よしひろと4代にわたり大館を拠点とした。その後アイヌとの戦いがしばらく続き、ついにアイヌと和睦して、蝦夷地のうちの和人地を掌握した。

大館は慶長11年(1606)に福山館に移転するまでの間、蝦夷地経営の拠点として重大な役割を果たした。

